

明治期から昭和初期における邦人作曲家による
フルート・オブリガート付き声楽作品
——近代日本におけるフルート・レパートリーの幕開け——

Vocal Pieces with Flute Obligato by Japanese Composers from the Meiji Era to the Early Showa Era:
The Dawn of the Flute Repertoire in Modern Japan

渡 邊 玲 子
WATANABE Reiko

キーワード：フルート、フルート・オブリガート、フルート・オブリガート付き声楽作品、梁田貞、橋本國彦

1. 序

1-1. 研究の背景と目的

邦人作曲家によるフルート作品は果たしていつ頃から生み出されていったのであろうか。近藤滋郎¹ (2003: 215) によると、「日本の作曲家によるフルート作品の最初は1930年²」とされ、それは山田耕筰 (1886-1965) の《「この道」を主題とする変奏曲》と松平頼則 (1907-2001) の《ソナタ》³である⁴。しかし、実はフルートが「日本でも歌曲のオブリガート楽器として作曲家の興味をさそいました」(近藤 2003: 216) とあるように、フルート独奏作品が創作される以前にはフルート・オブリガート付き声楽作品 (以下、フルート・オブリガート作品) が存在していた。そこで本稿では、フルート作品が初めて作曲されたとされる1930年の以前から、戦前の1939年までの間に邦人作曲家により作曲されたフルート・オブリガート作品の調査を行う。そのうち初作品ないしフルートの技巧上重要な作品を取り上げて検証することで、邦人作曲家によるフルート作品創作の事始めを明らかにしていく。

1-2. 洋楽受容におけるフルート・オブリガート作品の演奏例

まずは外国人作曲家によるフルート・オブリガート作品が日本でどのように演奏され始めたのか確認していこう。邦人作曲家にとってこのような編成は新しい発想ではなく、既に外国人フルーティストによって何度も演奏され、共有されていた響きであった。邦人作曲家がこのジャンルに取り組んだ背景には、外国人フルーティストの演奏が密接に絡んでいるため、まずは彼らの演奏記録から整理しておきたい。

はじめに、日本に最初に来日したフルーティストのジョン・レモーネ John Lemmmone (1862-1950) について見ていこう。彼によって初めて本格的なフルート音楽が日本で鳴り響いた1889年には、フルート独奏曲の他、独唱曲にフルートがオブリガートとして加わる作品も演奏されていた (渡邊 2023: 256)。近藤 (2003: 50-51) はそこで演奏された独奏曲について言及しているものの、フルート・オブリガート作品の詳細には触れていない。そこで筆者は一次資料を精査し、レモーネが演奏したフルー

ト・オブリガート作品を明らかにした⁵。【表1】はその一覧である。

表1 1889年のレモーネによるフルート・オブリガート作品の演奏記録

演奏日	曲名		作曲者		典拠	註*
	一次資料での記載	筆者による補足	一次資料での記載	筆者による補足		
6/4	Little bird so sweetly singing		Allen	詳細不明	JG、JWM	
6/6	Lo! here the Gentle Lark	喜歌劇《間違いの喜劇》第1幕より 〈見よ！優しい雲雀を〉	Bishop	ヘンリー・ローリー・ビショップ Henry Rowley Bishop (1786-1855)	JG、JWM	
6/6	“Sleeping Queen” Who is at my Window	喜歌劇《眠れる王妃》 〈窓辺に立つのは誰〉	Balfe	マイケル・ウィリアム・バルフ Michael William Balfe (1808-1870)	JWM	
6/21	“Mad Scene” from Lucia di Lammermoor	歌劇《ランメルモールのルチア》 第3幕 狂乱の場より 〈あの方の声の優しい響きが〉 (Il dolce suono)	/	ガエターノ・ドニゼッティ Gaetano Donizetti (1797-1848)	JG、JWM	a
6/24	Little bird so sweetly singing		Allen	詳細不明	JG、JWM	b
6/24	Serenade	セレナーデ	Gounod	シャルル・グノー Charles Gounod (1818-1893)	JWM	

*註 JG、JWM のどちらの新聞記事にもフルートのオブリガート付きという記載はなかったが、aはフルート・オブリガート付きの aria として有名であり、bは JG の6月5日付と JWM の6月8日付の批評に、6月4日に演奏された同曲に対して「フルート・オブリガート付き」とあったため、ここに取り上げた。

【表1】ではレモーネの1889年と1891年の来日のうち、最初の1889年のみを取り上げたが、明治期にはその後も、近藤（2003）や日本近代洋楽史研究会（1995）から、外国人フルーティストのアドルフ・テルシャック Adolf Terschak (1832-1901) やフレデリック・グリフィス Frederick Griffith (1879-1941) の来日が確認できる。

次に大正期以降の演奏記録を見ていこう。松下（1997）をはじめ、第二次世界大戦以前に来日した外国人フルーティストの演奏記録からも、このような作品が度々演奏されてきたことが窺える。【表2】は、秋山（1966）⁶の記載内容を基に、第二次世界大戦以前に演奏されたフルート・オブリガート作品を一覧にしたものである⁷。なお、作品と作曲者の正式名称は筆者が補完した。

表2 第二次世界大戦以前に演奏された外国人フルーティストによるフルート・オブリガート作品

演奏日	曲名	作曲者	演奏者
1923/6/30	歌劇《ブラジルの真珠》より 〈かわいい小鳥〉 “Charmant oiseau” in <i>La perle du Bresil</i>	フェリシアン・ダヴィッド Félicien David (1810-1876)	フリッツ・クロッケル Fritz Kröckel (生没年不明)
1923/6/30	喜歌劇《間違いの喜劇》 第1幕より〈見よ！優しい雲雀を〉 “Lo! Here The Gentle Lark” in <i>the Comedy of Errors</i> , Act I	H.R.ビショップ (1786-1855)	F.クロッケル
1929/4/27	ジプシーと鳥 “The Gypsy and the bird”	ジュリアス・ベネディクト Julius Benedict (1804-1885)	ルイ・アルベルギーニ Louis Alberghini (1890-1950)
1929/4/27	可愛い物まね鳥 “Pretty Mocking Bird”	H.R.ビショップ	L.アルベルギーニ
1929/4/27	夜鳴きうぐいす “Nightingale”	アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・アリヤブエフ Aleksandr Aleksandrovich Alyab'yev (1787-1851)	L.アルベルギーニ
1929/4/27	モーツァルトの主題による 華麗なる変奏曲 Bravour Variations on Mozart Theme	アドルフ・アダン Adolphe Adam (1803-1856)	L.アルベルギーニ

演奏日	曲名	作曲者	演奏者
1929/5/12	みそさざい “La Capinera”	J.ベネディクト	L.アルベルギーニ
1931/4/26	歌劇《ランメルモールのルチア》 第3幕 狂乱の場より 〈あの方の声の優しい響きが〉	G.ドニゼッティ	フランチェスコ・エルシイ Francesco Elsie (生没年不明)
1931/4/27	喜歌劇《間違いの喜劇》 第1幕より〈見よ！優しい雲雀を〉	H.R.ビショッブ	F.エルシイ
1931/4/28	セレナーデ	C.グノー	F.エルシイ
1931/4/28	黒帽子	J.ベネディクト	F.エルシイ
1931/4/31	歌劇《ランメルモールのルチア》 第3幕 狂乱の場より 〈あの方の声の優しい響きが〉	G.ドニゼッティ	F.エルシイ

以上の通り、フルート・オブリガート作品は1889年から外国人フルーティストのレパートリーとして度々演奏され、共有された響きであったことが確認できる。これらの表を一覧すると、フルートのトリルや細かな音符によって鳥の鳴き声を模倣したような作品が目立ち、中でもビショッブの〈見よ！優しい雲雀を〉の演奏頻度が多いことが分かる。《埴生の宿》の作曲者として親しまれているビショッブによる本作は、外国人フルーティストによって頻繁に演奏されただけでなく、1929年に「[日本人]フルーティストのパイオニア」(近藤 2003: 133)として知られる岡村雅雄 (1892-1961) によって演奏され⁸、1932年には日本のコロラトゥーラ・ソプラノの先駆者である関屋敏子 (1904-1941) によっても録音されている。

ところで、これらの作品は邦人作曲家にどのような影響を与えたのであろうか。邦人作曲家のフルート・オブリガート作品について、近藤 (2003) や青山 (2006) はいくつかの作品を取り上げているものの、一部の作品を除き、楽曲の詳細は明らかにされていない。

そこで以下では、第二次世界大戦が始まる1939年以前に作曲された邦人作曲家のフルート・オブリガート作品を対象とし、当時どのような作品が日本に存在し、演奏されていたのかについて、楽譜の出版および演奏記録の面から考察していきたい。

1-3. 邦人作曲家によるフルート・オブリガート作品

作曲家別に作品名、作曲年、編成一覧できるものとして、富樫 (1956) が挙げられる。ここには63名の邦人作曲家について、彼らの略歴や作品目録が記されている。なお、日本近代音楽館編 (1999) には、1930年に結成された新興作曲家聯盟に所属する邦人作曲家のうち、27名の邦人作曲家の活動や主要作品が掲載されているが、ここでは各作品の楽器編成を含む情報は確認できないため、本稿では富樫 (1956) に依拠することとする。これに加え、三浦 (1931) や堀内 (1948) を基に邦人作曲家の歌曲集なども調査した。その結果1939年以前には梁田貞 (1885-1959) の《昼の夢》をはじめとし、藤井清水 (1889-1944)、橋本國彦 (1904-1949)、深井史郎 (1907-1959)、服部正 (1908-2008)、平井康三郎⁹ (1910-2002) らによって、少なくとも計13点のフルート・オブリガート作品が作曲されていることが分かった。【表3】はその一覧である¹⁰。なお本稿では扱わないが、1940年以降も邦人作曲家のフルート・オブリガート作品は存在している。

表3 1939年以前に作曲された邦人作曲家によるフルート・オブリガート作品

作曲年	作曲家	作詩家	作品名	編成	富樫への記載の有無	註
1911 (明治44)	梁田貞 1885-1959	高安月郊 1869-1944	昼の夢	Vo, Fl or Vn, Pf		
1916 (大正5)	梁田貞	梁田晴嵐 (生没年不明)	花の春 (圓山の櫻)	Vo, Fl or Vn, Pf		
1922 (大正11)	藤井清水 1889-1944	野口雨情 1889-1944	おかよ	Vo, Fl, Pf		
1923 (大正12)	梁田貞	三木露風 1889-1964	野ばら	Vo, Fl, Pf		
1924 (大正13)	梁田貞	加藤まさを 1897-1977	鈴蘭	Vo, Fl or Vn, Pf		
1928 (昭和3)	橋本國彦 1904-1949	北原白秋 1885-1942	城ヶ島の雨	Vo, Fl or Vn, Pf	○	
1928 (昭和3)	橋本國彦	深尾須磨子 1888-1974	笛吹き女	Vo(Sop), Fl, Pf	○	a
1929 (昭和4)	橋本國彦	久保田宵二 1899-1947	富士山見たら	Vo, Fl or Vn, Pf	○	
1931 (昭和6)	橋本國彦	西条八十 1892-1970	幌馬車	Vo, Fl or Vn, Pf	○	
1934 (昭和9)	橋本國彦	西条八十	笛	Vo, Fl, Pf	○	
1935 (昭和10)	平井康三郎 1910-2002	石川啄木 1886-1912	ふるさとの	Vo, Fl or Vn, Pf		
1936以前 (昭和11)	服部正 1908-2008	蒲原有明 1875-1952	からたち	Vo, Fl, Pf	(○)	b
1938 (昭和13)	深井史郎 1907-1959	北原白秋	日本の笛 1. 伊那、2. 出船 3. 矢部のやん七	Vo, Fl, Pf	○	
以下、富樫(1956)の各作品編成欄にフルートの記載はあるものの、2024年1月の時点で、オブリガート・パートが書かれた楽譜を筆者が確認できていないもの。 なお、編成欄の楽器編成は、富樫(1956)に記載のままとする。						
1929 (昭和4)	橋本國彦	深尾須磨子	舞	Vo, Fl又は 3管Orch伴奏	○	
1932 (昭和7)	石井五郎 1903-1978	佐伯郁郎 1901-1992	海は生きている	Vo, Fl, Pf	○	
1939 (昭和14)	菅原明朗 1897-1988	記載なし	万葉集3章	Vo(Sop), Fl	○	
1929-1947 (昭和4-22)	平井康三郎	記載なし	『日本歌曲集』より	Vo, Pf 又は Vo, Fl, Pf, 又は Vo, サロン伴奏	○	
以下、2024年1月の時点で作曲年不明なもの。						
	深井史郎	深尾須磨子	秋	Vo, Fl, Pf		
	深井史郎	深尾須磨子	ふるさと	Vo, Fl, Pf		
	平尾貴四男 1907-1953	土井晩翠 1871-1952	荒城の月に據る変奏 曲：オーケラロ(または フルート)と歌、ピアノ のために	Vo,オーケラロ (Fl), Pf		

註 a : 後述するが、本作の原作はソプラノと2管編成のオーケストラ(富樫1956では3管編成となっていた)である。しかし、初演はフルートとピアノ伴奏という形で行われ、現在もこのような編成での楽譜が流通しているため、本稿でもフルート・オブリガート作品として扱う。

註 b : 作品名は富樫(1956)に記載されていたが、編成の欄には「T [テノール], Pf [ピアノ]」とあり、フルートの記載はなかったため○に括弧を付けた。また、作曲年についても富樫には「昭和12 [1937]」年とあるが、前年の1936年にはすでに2つの版からフルート・オブリガート付きの楽譜が出版されていたため、作曲年欄には「1936年以前」とした。

次項では、1939年以前に作曲された邦人作曲家のフルート・オブリガート作品13点のうち、初作品ないしフルートの技巧上重要なものとして、梁田貞の《昼の夢》、《花の春》、橋本國彦の《城ヶ島の雨》、《笛吹き女》の4作品を取り上げ、作曲年代順に分析を行っていく。

2. 梁田貞の作品

2-1. 梁田貞^{やなただし} (1885 [明治18]-1959 [昭和34])

【表3】の上段に示したように、日本で最初にフルート・オブリガート作品に着手したのは、梁田貞(1885-1959)と考えられる。梁田は《城ヶ島の雨》(1913)や《どんぐりころころ》(1921)の作曲者として日本人に馴染み深い。前述の富樫(1956)に梁田に関する記述はなかったが、堀内(1948: 170)には「[邦人作曲家] まだ器楽曲に殆ど手がつかなかったが声楽曲では《隅田川》(〔中略〕梁田貞曲。〔明治〕44年9月)、《昼の夢》(〔中略〕梁田貞曲。〔明治〕45年1月)、《涙》(〔中略〕山田耕筰曲。〔明治〕45年4月)、《昼》(〔中略〕弘田龍太郎曲。〔明治〕45年8月) その他の新しいリード的なものが生まれ」とあり、三浦(1931: 613)にも、明治後期に創作された歌曲として梁田の《昼の夢》が挙げられ、その他にも多数の作品名が掲載されていた。これらの記述を頼りに歌曲集などを調査したところ、梁田は計4点のフルート・オブリガート作品を作曲していることが分かった。次項では彼の作品のうち、《昼の夢》と《花の春》について詳しく見ていく。

2-2. 《昼の夢》^{たかやすげっこう}(高安月郊作詩)

2-2-1. 作品の概要

1911年8月¹¹、26歳の梁田によって作曲された本作は、邦人作曲家による最初のフルート・オブリガート作品であると考えられる。なお、この時代における歌手の助奏楽器には、フルートに限らずヴァイオリンも使用されることが多く、玉川大学編集部編(1961)を除く、本調査で確認した楽譜にはすべて「Voice, Flute or Violin, Piano」と記されている¹²。また、本作が誕生するまでのいきさつについては、玉川大学編集部編(1961)や岩崎(1977)で書かれているため詳細は省略するが、それらによると、良い詩を求め、音楽学者の牛山充(1884-1963)に相談したところ、文学者の高安月郊から未発表の詩を得られることになり、牛山がそれを梁田に手渡したことを機に作曲へと至ったのだという。完成された作品は、梁田の7歳下の妹である梁田敬(1892-?)と、梁田の札幌中学時代の親友である高木直一(?-1930)が結婚した際、妹の敬に献呈されている¹³。

楽曲を見ると、作品の形式、テンポ、拍子、助奏楽器の使い方から、明治期以降これまでに幾度となく演奏されてきたグノーの《セレナーデ》の影響が色濃く表れている。【表4】と【表5】を比較すると、どちらの作品も短い序奏付きの第3節までの有節歌曲であり、小節数も梁田の107小節に対しグノーは101小節¹⁴とほぼ等しい。演奏時間は共に5分程度で、テンポも歌が始まる部分以降はどちらも *moderato* となっている。さらに、12/8拍子と6/8拍子の違いはあるものの、複合拍子であることが共通している。助奏楽器の緩やかな旋律で奏でられた冒頭は、歌手の歌い出しを誘うような穏やかな響きであり、その後はフレーズの切れ目を繋

表4 梁田《昼の夢》形式分析

小節	原詩	区分	小節数	編成
1-	/	前奏	5	Fl or Vn, Pf
6-	第1節	A	34	Vo, Fl or Vn, Pf
40-	第2節	A	34	Vo, Fl or Vn, Pf
74-107	第3節	A'	34	Vo, Fl or Vn, Pf

表5 グノー《セレナーデ》形式分析

小節	原詩	区分	小節数	編成
1-	/	前奏	6	Fl or Vn, Pf
7-	第1節	A	31	Vo, Fl or Vn, Pf
38-	第2節	A	31	Vo, Fl or Vn, Pf
69-101	第3節	A'	33	Vo, Fl or Vn, Pf

ぐようにして、レガートで滑らかに奏でられている。音域はどちらもフルートで比較的鳴らしやすい2オクターブ程が使用されているが、最高音がグノーより低い梁田の作品の方が、フルートでオブリガート・パートを演奏する場合、技術的に易しいと言えるだろう。

一方《セレナーデ》の知名度については、高等女学校教材用として女声三部合唱を収めた天谷編(1909)をはじめ、これまで数々の曲集に所収されているだけでなく、出来上がった曲を牛山が聴いた際に「これにはグノーのセレナーデのように、フルートまたはヴァイオリンのオブリガートがついている¹⁵⁾(岩崎 1977: 117)と表現していることから、《セレナーデ》がこの時代のオブリガート付き声楽作品を代表するような有名な楽曲であったことも窺える。このように、邦人作曲家による最初期のフルート・オブリガート作品は、西洋音楽の模倣から生まれたものであるとすることができる。

2-2-2. 出版

次に、作品がどの程度普及していたのかを調査するため、楽譜の出版状況に着目した。【表6】は出版年と出版社を示したものである¹⁶⁾。岩崎(1977: 123)によると、本作は完成後まもなく雑誌『音楽』の付録として発表されたが、独立した楽譜として刊行されたのは、1914年の十字屋楽器店から出版されたピースが最初であるという。このピース譜に出版部数は書かれてい

表6 楽譜の出版状況《昼の夢》

出版年(西暦)	出版年(和暦)	出版社	備考
1911	明治44	東京音楽学校学友会	雑誌『音楽』の付録
1914 1917 1921 1922 1926 1928 1935	大正3 初版 大正6 再版 大正10 第3,4版 大正11 第6版 大正15 第10版 昭和3 第11版 昭和10 第12版	十字屋楽器店	ピース譜 初版と再版は25銭、第3,4版は50銭 上記以外は現物未確認 (2024年1月時点)
1950 1967	昭和25 第1刷 昭和42 第26刷	音楽之友社	『独唱名曲八十番』より 187-193頁
1958 2001	昭和33 第1版第1刷 平成13 第1版第121刷	全音楽譜出版社	『日本名歌110曲集 1』 より70-76頁
1961	昭和36	玉川大学出版部	『梁田貞名曲集』より220-225頁
1977	昭和52	東京音楽社	『音楽の師 梁田貞』より 付録楽譜5-10頁
1979	昭和54	東京音楽社	『世界女声合唱名曲選4 日本抒情歌 篇』より26-34頁 独唱ではなく、歌部分が女声三部合唱に 編曲された譜面である
1983 1999	昭和58 初版 平成11 第12版	東亜音楽社	『诗情あふれる世界の名曲 名歌100曲選①』より236-242頁

ないが、筆者が調査した限りでは第12版までの存在が確認できている。一方、戦後も数々の曲集に所収されていることから、本作は大正期から昭和期にかけて広く親しまれた作品であると言える。

2-2-3. 演奏、録音記録

本作は原曲のフルート又はヴァイオリン助奏の他、オーケストラ伴奏や室内楽編成でも演奏されている。例えば、1915年にはヴァイオリンの助奏付きで演奏され(堀内 1948: 2004)、オーケストラ伴奏では、1932年にソプラノ歌手の荻野綾子(1898-1944)や、1933年にはテノール歌手で、梁田の愛弟子であった奥田良三(1903-1993)によって録音されている。ラジオでは、宮内省楽部の家に生まれ、オーケストラ奏者として活躍した奥好寛(1915-2000)が1935年に演奏し、さらに1937年の同番組でも奥の名前と共に「現代日本の音楽 梁田貞作品」とあることから、ここでも演奏された可能性がある¹⁷⁾。

またレコードでは、先述の宮田が1944年にチェロとハーブの編成でも録音しているというように、本作はさまざまな編曲で大正期から第二次世界大戦以前に流行していた楽曲であった。

2-3. 《花の春（圓山の櫻）》^{やな だ せいらん}（梁田晴嵐作詩）

2-3-1. 作品の概要

《昼の夢》に次いで、1916年4月8日に作曲された《花の春（圓山の櫻）》にもフルート又はヴァイオリンのオブリガートが付いている。本作について、同曲山田編（1929）の楽譜に掲載された門馬（1929: 255）による曲目解説に「如何にも春の楽しそうな気分の出で居る曲であって、しかも唱歌には困難ではない。悪く言えば平凡かもしれないが、誰にも一寸好まれ易いことは事実である」とあるように、二長調（又はト長調）、2/4拍子の明るい曲調で書かれた本作は、【表7】のように前奏付き ABA' の3部形式で、演奏時間は1分半程度と短く、軽やかで聴きやすい作品である。また作品名に括弧付きで「圓山の櫻」ともあるが、

表7 《花の春》形式分析

小節	原詩	区分	小節数	編成
1-	/	前奏	6	Fl or Vn, Pf
7-	咲いた～	A	13	Vo, Fl or Vn, Pf
20-	白い雪～	B	19	Vo, Fl or Vn, Pf
39-54	咲いた～	A'	16	Vo, Fl or Vn, Pf

これは梁田の故郷である北海道・札幌の、桜の名所で知られる円山公園の桜を意味するのであろう。

作品の内容を見ていくと、オブリガート・パートはセクションBを除き、トリルやプラルトリラーが多用されている。序で触れたように、明治期に度々演奏されてきたフルート・オブリガート作品の作品名には、鳥の名前が付けられている場合が多く、トリルや細かな音符で鳥の鳴き声が表現されていた。本作の場合、作品名や歌詞に鳥の名前は出てこないものの、本作と同じく曲名に「春」が含まれるヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲《春》の中の「鳥の歌」(独奏ヴァイオリンと第1、第2ヴァイオリンのソロ部分)を彷彿とさせるように、前奏のトリルやプラルトリラーは小鳥のさえずりを思わせる。続くAとA'部分のトリルは、歌詞の「咲いた咲いた」や「歌へ歌へ」と呼応しており、春が来た喜びや桜の花が開く様子を描写しているようでもある。

2-3-2. 出版

本作は1918年に共益商社書店から初版が出版されて以降、1961年までの間にいくつもの版に所収されている。多くの人が目にすることによって、助奏楽器としてのフルートのイメージが広まるきっかけとなった作品とも言

表8 楽譜の出版状況《花の春》

えるだろう。

また、【表8】に示したこれらの楽譜から、本作には二長調とト長調の2種類の譜面が存在していることが分かる。この点について、玉川大学編集部編（1961: 372）の

出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	出版社	備考	調性
1918 1919	大正7 初版 大正8 再版	共益商社書店	ピース譜 (装幀は田辺至)	D:
1929	昭和4	春秋社	『世界音楽全集』 第7巻より128-130頁	D:
1933	昭和8	目黒書店	『梁田貞歌曲全集 第1巻』より8-11頁	G:
1940 1941 1942	昭和15 初版 昭和16 第8版 昭和17 第9版	新興音楽出版社	『なつかしの愛唱歌第1編』 より39-41頁 2000部発行	D:
1961	昭和36	玉川大学出版部	『梁田貞名曲集』より34-37頁	G:

編集後記に「先生自筆の訂正原本に移調の指示があったものは、それに従った」とあるように、より多くの人がこの曲に親しめるようにという作曲者の歌唱者への配慮が感じられるが、本作をフルートで演奏する場合は、二長調の方が好ましい。なぜなら、二長調を基準とすると、ト長調の譜面はフルートとピアノが5度下がり、歌が4度上がる作りになっているが、ト長調の場合、【表7】のセクションBにおいてフルートの最低音であるhが度々使われることになる。つまりH足部管でないと演奏は不可能だが、【表3】で示した1939年以前のフルート・オブリガート作品13点には、いずれもhは使用されていない¹⁸。よってこれらの事情から、当時H足部管のフルートを持っている人はそういなかったと推察できる。また、全体を通して音域の高い方が、一般的にフルートらしい音色に聴こえるだろう。こうした観点から、フルートで演奏する場合は、音域の高い二長調の方が好ましいと言える。

2-3-3. 演奏、録音記録

現在、演奏や録音の記録は確認できていないため、演奏会で頻繁に取り上げられた楽曲とは言えない。しかし、1918年の初版から昭和中期にかけて何度も出版されており、曲目解説に「唱歌には困難ではない」(門馬 1929: 255) とあることから、個々人が自宅や友人同士で楽しむような、身近な作品であったと推察できる。

3. 橋本國彦の作品

梁田に続き、最初期のフルート・オブリガート作品を書いた作曲家に橋本國彦がいる。ここからは彼の作品のうち《城ヶ島の雨》と《笛吹き女》を取り上げ、作品に見られるフルートの技巧性にも触れながら考察していく。

3-1. 橋本國彦 (1904 [明治37]-1949 [昭和24])

橋本は梁田と同様に、フルートやヴァイオリンを積極的に声楽作品に取り入れている。その理由について、昭和期に活躍したソプラノ歌手であり、橋本と親交の深かった四家文子 (1906-1981) (2010: 203) は、「もともと彼がバイオリン科にいた」からであり、その結果「バイオリンやフルートの助奏を伴ったものが多く、アンサンブルの調和美に富んでいる」と指摘している¹⁹。【表9】の通り、橋本のオブリガート付き声楽作品は全9点で、そのうちフルートが関わるものが5点、ヴァイオリンが関わるものが7点である²⁰。

また、橋本が声楽作品にフルートを取り入れ始めたのは1928年の《城ヶ島の雨》以降だが、その背景には同年にフランスから帰国したフルーティスト兼詩人の深尾須磨子の影響が考えられる。【表3】において多くの作曲家が深尾の詩に作曲しているように、詩人として活躍していた深尾だが、フランスの巨匠として知られ

表9 橋本國彦のオブリガート付き声楽作品

作曲年 (西暦)	作曲年 (和暦)	作詩家	作品名	編成
1927	昭和2	長田幹彦	夢見る丘の鈴蘭	Vo, Vn, Pf
1928	昭和3	北原白秋	薊の花	Vo, Vn, Pf
1928	昭和3	北原白秋	城ヶ島の雨	Vo, Fl or Vn, Pf
1928	昭和3	西条八十	お菓子の家	Vo, Vn, Pf
1928	昭和3	深尾須磨子	笛吹き女	Sop, Fl, Pf
1929	昭和4	久保田宵二	富士山見たら	Vo, Fl or Vn, Pf
1930	昭和5	北原白秋	山の母	Vo, Vn, Pf
1931	昭和6	西条八十	幌馬車	Vo, Fl or Vn, Pf
1934	昭和9	西条八十	笛	Vo, Fl, Pf

るマルセル・モイーズ Marcel Moyse (1889-1984) に師事するなど、フルーティストとしての側面も持っていた。「[橋本は]当時フランスから帰った深尾須磨子から強い感化を受けている」と四家(1970: 205) が指摘しているように、彼女の存在が橋本にヴァイオリンのみならず、フルートも声楽作品に取り入れることを促したのであろう。では、彼が初めて作曲したフルート・オブリガート作品はどのようなものであったのだろうか。

3-2. 橋本國彦作曲《城ヶ島の雨》(北原白秋作詩)

3-2-1. 作品の概要

橋本が最初に作曲したと考えられるフルート・オブリガート作品は《城ヶ島の雨》であり、これにはフルート又はヴァイオリンの助奏が付いている。本作は1928年2月11日に作曲されたが、同じ北原白秋(1885-1942)の詩「城ヶ島の雨」(1913)には、前項で触れた梁田をはじめ(1913)、山田耕筰(1924)も作曲している。演奏時間にして3分30秒程の本作は、通作歌曲形式で書かれており、厳密ではないがABA'とも捉えることができる。ここからは作曲者自身による楽曲解説および演奏上の指南を通して、作品への理解を深めていきたい。以下は、1928年に共益商社書店から出版されたピース譜のはしがきから、オブリガートに触れている部分を抜粋したものである。

白秋さんの「城ヶ島の雨」はまことに美しい舟唄だと思ひます。[中略]この曲にはオブリガート(助奏)がついてゐます。フルート或はヴァイオリンで奏するのですが、尺八で奏してもまた味があると思ひます。

演奏上作曲者自身の考へを少し記しますと[中略]助奏部のない所[は、中略]すべて極めて自由に歌はれてもよい様に作られてゐます。之に反して、助奏者は獨唱者と同一旋律を同時に或いは相前後して奏する場合、すべて、その獨唱者の歌ひ方を模倣すべきで、一體に決して背景的色彩以上に出ない様注意してもらひたいのです。

助奏無しの場合も不可能ではありません。然しこの場合には、助奏部を適當にピアノ伴奏部へ編入して演奏して下さい。

まず作品の全体像を確認していくと、本作は橋本の解説に「舟唄」とあるように、付点のリズムを伴いゆらゆらと揺れる音型に加え、長調と短調を揺蕩することで感傷的な響きが生まれている作品である。また上記の言説から、助奏部は情景を表現するために重要なパートであると読み取ることができ、その役割は大きく3つに分けられる。1つ目は、序奏部分(1-6小節)において、作品の主題にあたる8小節目以降の声楽パートの歌い出し部分をフルートが奏することで、聴き手に作品の雰囲気的印象付け、全体の輪郭を形作る役割である。曲の終盤も同様である。2つ目は、12小節目や16小節目などに表れているように、声楽パートのフレーズの語尾をエコーのように奏することで、作品の情景に奥行きを持たせる役割である。3つ目は、声楽パートとユニゾンで奏することで、主旋律を強調し、更には歌手が歌いやすいように音の運びを滑らかにする役割である。本作は、フルートの運指や音域の観点から見て技術的に難しくはないが、作曲者自身の解説にあるように、助奏者は助奏楽器と

しての役割を自覚して、演奏されるべき楽曲である。

楽譜の出版については【表10】の通り、本作が作曲された1928年に共益商社書店からピース譜が出版され、戦後は橋本の作品を集めた曲集に所収されている。

表10 楽譜の出版状況《城ヶ島の雨》

出版年 (西暦)	出版年 (和暦)	出版社	備考
1928	昭和3	共益商社書店	『共益歌曲楽譜』第7編
1970 2010	昭和45 初版 平成22 第10版	全音楽譜出版社	『橋本国彦歌曲集1』 より18-21頁
1991	平成3	全音楽譜出版社	『日本歌曲全集⑨ 橋本国彦作品集』 より42-45頁
1993	平成5	音楽之友社	『日本歌曲全集9 橋本国彦 I』 より73-76頁、77-80頁(高声用)

3-2-2. 演奏、録音記録

本作は1936年に岡村によって演奏されているが(近藤 2003: 付録13)、木村(2009: 288-299)によるレコードの記録からも、邦人フルーティストによって演奏されてきたことが確認できる。それによると、この《城ヶ島の雨》は岡村が1935年に、NHK交響楽団(元 日本交響楽団)において首席奏者や日本フルート協会の会長も務めた吉田雅夫(1915-2003)によって1952年に録音されている。このように初期の邦人フルーティストがラジオやレコードで演奏することで、本作は多くの日本人に共有された響きとなり、レパートリーとして定着した作品であると言えるだろう。

3-3. 橋本国彦作曲《笛吹き女》(深尾須磨子作詩)

3-3-1. 作品の概要

1928年に作曲されたソプラノと二管編成のオーケストラによる本作は(全音楽譜出版社出版部 1996: 243)、翌年の5月23日に開催された荻野綾子の独唱会において、フルートの助奏とピアノ伴奏という形で初演された(青山 2006: 25)。原曲はオーケストラ伴奏であるものの、初演はこうした編成であり、現在はソプラノとフルートとピアノに編曲された出版譜が流通しているため、本稿でもフルート・オブリガート作品として扱うこととする。また、当時の演奏の様子についてはグルッペ(1929)が触れているが、演奏したフルーティストやピアニスト名には言及していない。しかし、先述した詩人兼フルーティストの深尾は、荻野などの声楽家のリサイタルにおいて助奏者としての出演記録が多く(近藤 2003: 165)、彼女は1921年から荻野と十数年の月日を共にし、二人で渡欧するほど親交が深かったことから(逆井 2002: 70)、初演のフルーティストは深尾である可能性が高い。作品は通作歌曲形式で書かれており、原詩は全12節から成る。

3-3-2. 作品の技巧

ここからはオブリガート・パートに見られる技巧に触れていく。本作は、曲の長さ、音域、音の密集度、転調の回数から、同時代のフルート・オブリガート作品と比較して、演奏に求められる技巧性が高い。例えば、これまでの作品が3-4分程度であるのに対し、本作は15分程と長いことから、フルートとピアノのみで奏でる部分も長くなり、所々でフルート独奏曲のような印象を受ける。使用される音域も2オクターブ半程に広がり、音数が増えるのに加え、7回も転調を繰り返している。オブ

リガート・パートのみならず、声楽やピアノも同様に難易度が高くなっていることから、本作は全体を通して技巧的な作品であると言える。

4. 結

本稿では、明治期以降の来日外国人フルーティストによるフルート・オブリガート付き声楽作品の演奏記録と、明治・大正期から1939年までに作られた邦人作曲家のフルート・オブリガート作品を調査し、楽譜の出版と演奏記録と共にその変遷を辿った。その結果、邦人作曲家によるフルート・オブリガート作品の創作は1911年から始まっており、邦人によって初めてフルート独奏作品が作曲されたとされる1930年の以前には、少なくとも8点のフルート・オブリガート作品が作曲されていたことを確認した。その後もこういった作品は多数作曲されているが、その背景には外国人フルーティストの影響があり、彼らの存在が多くの邦人作曲家にフルート・オブリガート作品の作曲を促したと言える。そうした流れを経て、岡村雅雄をはじめとする最初期の邦人フルーティストの活躍へと繋がったのである。したがって、これらのフルート・オブリガート作品こそが、邦人作曲家によるフルート作品創作の始まりと見なすことができるだろう。

作品の内容を見ていくと、現時点で邦人作曲家による最初と考えられる梁田貞の《昼の夢》(1911)には、作品の形式、テンポ、拍子、助奏楽器の使い方など、それまでの日本で何度も演奏されてきたグノーの《セレナーデ》の影響が色濃く表れており、《花の春》(1916)ではトリルや細かな音符によって小鳥のさえずりを彷彿とさせる点に、来日外国人フルーティストによる演奏レパートリーとの関連を見出すことができる。一方、橋本國彦の《城ヶ島の雨》(1928)のように、助奏は尺八でも代用可とする曲が現れる点からは、日本的なアイデンティティの模索も垣間見られる。またフルートの技術的観点から見ると、梁田による最初期の作品や橋本の《城ヶ島の雨》は助奏楽器としての域を出ないのであったが、1928年の《笛吹き女》以降は、曲の長さ、音域、音の細かさ、アンサンブルの複雑さなどから、フルートの現実的な奏法に寄り添いつつも、技巧的な作品が生まれていく。そして深尾須磨子などの邦人フルーティストの活躍と共に、橋本のような高度な技巧を発揮する作品も現れるのである。西洋音楽の模倣から生まれた邦人作曲家のフルート・オブリガート作品は、こうした技術的な段階を経て、やがて邦人作曲家によるフルート独奏作品の創作へと繋がっていくのである。

註

- 1 日本におけるフルートの歴史を紐解く上で、近藤（2003）が果たした役割は非常に大きい。近藤は日本へのフルートの伝来の他、明治期以降の来日外国人フルーティストや、初期の邦人フルーティストに焦点を当て、彼らの経歴や演奏記録について纏めている。
- 2 本稿において、引用文の表記は原文のままとする。
- 3 近藤（2003: 215）は、1930年9月24日にラジオ放送されたこの《ソナタ》が、1936年に作曲された《ソナチネ》の第1楽章であると指摘している。しかし作品名に関して、茨城県立歴史館主催の企画展「音楽家・松平頼則とその時代——時代を切りひらいた巨匠の軌跡——」において展示されていた、1930年の自

筆譜を筆者が閲覧したところ、その楽譜には「Sonatine」と書かれていた（2023年12月2日閲覧）。よって、このラジオ放送における「ソナタ」という表記は「ソナチネ」の誤植であるか、或いはラジオ放送以降に「ソナタ」から「ソナチネ」へと楽譜が書き直されたと考えられる。

- 4 邦人作曲家による最初期のフルート作品について、近藤（2003）は上記で取り上げた2作品の他に、1930年から1950年に作曲された邦人作曲家によるフルート曲（協奏作品、ソロ作品、デュオ作品）の一覧を掲載している（近藤 2003: 付録26-28）。筆者も1930年が邦人作曲家によるフルート独奏作品の創作者の始まりかどうかを調査するため、『本邦洋楽変遷史』（三浦 1931）、『音楽五十年史』（堀内 1948）、『日本の洋楽百年史』（秋山 1966）の3つの文献を確認したが、1930年以前に創作された邦人作曲家のフルート作品は確認できなかった。この他、明治期以降（1985年まで）の出版楽譜総覧を目指したものに『日本の作曲家の作品 楽譜所蔵目録』（青木 1991）がある。ここには近藤（2003: 215）において最初期のフルート作品として言及されている山田耕筰の《「この道」を主題とする変奏曲》（1930）や松平頼則の《ソナタ》（1930）をはじめ、1930年以前の作品は掲載されていなかった。これらの事情から、現時点では1930年が邦人作曲家による最初期の独奏作品の創作時期と見なすこととする。
- 5 筆者は、英字新聞 *The Japan Gazette* 1889（June 5th 2, 7th 2, 8th 3, 11th 2, 13th 2, 18th 2, 22nd 3, and 25th 3）、*The Japan Weekly Mail* 1889（June 8th 552-553, 15th 582, 22nd 612, and 29th 636-637）を参照した。なお表では *The Japan Gazette* を JG、*The Japan Weekly Mail* を JWM と表記する。
- 6 秋山（1966: 4）には「資料の出典は、新聞・雑誌・演奏会プログラム・文書類とし、単行本からの引用はしない」とあるように、ここに記載の内容は一次資料を元に作成されたものであると言える。
- 7 【表2】は外国人フルーティストによる演奏記録に焦点を当てて作成したが、同書には、邦人フルーティストの横山國太郎（生没年不明）が1914年3月12日に F. ダヴィッドの歌劇《ブラジルの真珠》より〈かわいい小鳥〉を演奏したとされる記録も残っていた（秋山 1966: 279）。
- 8 岡村の演奏記録は、近藤（2003: 付録9）の「1929年10月15日 [フルートと独唱][……] 優しき雀 / ビシヨップ」を参照した。
- 9 筆者が確認した楽譜には「平井保喜」という本名が使われていたが、本稿では一般的に知られている「平井康三郎」の名を用いることとする。
- 10 以降、表中のVoは声楽、Sopはソプラノ、Flはフルート、Vnはヴァイオリン、Pfはピアノを表している。なお、この表を作成するにあたり参照した楽譜の書誌は参考文献に掲載した。
- 11 作曲年月は、玉川大学編集部編（1961: 225）、および岩崎（1977: 116）に従った。
- 12 玉川大学編集部編（1961）のみヴァイオリン表記はなく、編成は「Voice, Flute, Piano」となっていた。また、梁田は《蝶の夢》、《二つの里》などのヴァイオリン・オブリガート付き声楽作品も作曲している。
- 13 「[中略] 北の国のふるさとに居る妹に此曲を送る」と書かれた十字屋楽器店によるピース譜や、妹の敬の言説からも（玉川大学編集部編 1961: 324）、彼女に宛てた作品であることが確認できる。
- 14 小節数は、出版社によって若干の違いが生じる。
- 15 牛山の言説は、『全人』第119号からの引用とされている。
- 16 出版年の「版刷」状況は記載の通りとした。また、筆者は2024年1月の時点で楽譜を確認できていないが、日本近代音楽館編（2005: 34-35）の記録からは、この曲は後に平尾貴四男（1907-1953）によってヴ

ァイオリン、ヴィオラ、ピアノ用にも編曲されている。

- 17 奥の演奏記録は近藤（2003: 付録13, 14）を参照した。
- 18 一方、これらの13作品のうち最高音が出てくるのは深井の《日本の笛》(1938) で、その音の高さはc4である。
- 19 彼は1924年の20歳の時に東京音楽学校本科器楽部に入学した。ヴァイオリンを専攻していたため、声楽作品だけでなくヴァイオリンのための作品も数多く残している。
- 20 表は富樫（1956）を基に作成した。しかし、富樫（1956: 235）の作品編成欄にフルートの記載がある《舞》は、2024年1月までの時点において、筆者が確認した楽譜にオブリガート・パートが書かれていなかった。よって本稿では表中から除外した。

参考文献

図書、論文、雑誌、曲目解説

- 青木陽子 1991 『日本の作曲家の作品 楽譜所蔵目録』 東京：国立音楽大学附属図書館
- 青山夕夏 2006 「近代日本人作曲家による初期のフルート音楽」 香川大学教育学部『香川大学教育学部研究報告 第I部』第126巻：17-32
- 秋山龍英 1966 『日本の洋楽百年史』 東京：第一法規出版
- 岩崎呉夫 1977 『音楽の師 梁田貞人とその作品』 東京：東京音楽社
- 音楽之友社（編） 1993 『日本歌曲全集7 弘田龍太郎・杉山長谷夫・成田為三・藤井清水』 東京：音楽之友社
- 木村喬著（編） 2009 『日本の作曲家・演奏家 SPレコード総合目録 演奏家篇 第1巻（指揮・楽器）』 東村山：アナログ・ルネッサンス・クラブ
- 国立音楽大学附属図書館・現音ドキュメンツ作成グループ（染谷周子、杉岡わか子、三宅巖）（編） 1999 『ドキュメンタリー新興作曲家連盟 戦前の作曲家たち 1930-1940』 東京：国立音楽大学附属図書館
- グルッペ、モーキイ 1929 「荻野綾子獨唱會」 『音楽世界』 1(7): 54 東京：音楽世界社
- 近藤滋郎 2003 『日本フルート物語』 東京：音楽之友社
- 逆井尚子 2002 『深尾須磨子 女の近代をうたう』 東京：ドメス出版
- 全音楽譜出版社出版部（編） 1996 「詩と解説」 『橋本国彦歌曲集2』 242-243 東京：全音楽譜出版社
- 高柳守雄（他） 1975 『素顔の巨匠たち』 東京：音楽之友社
- 富樫康 1956 『日本の作曲家』 東京：音楽之友社
- 富樫康 1965 「深井史郎年譜」 深井史郎 『恐るるものへの風刺 ある作曲家の発言』 355 東京：音楽之友社
- 土肥みゆき（編著） 1986 『信時潔・橋本国彦』 京都：私家版
- 日本近代音楽館（編） 1991 『橋本国彦年譜』 東京：日本近代音楽館
- 1993 『深井史郎年譜』 東京：日本近代音楽財団
- 1999 『プロフィール27 作曲家群像——新興作曲家聯明の人々——』 東京：日本近代音楽財団
- 2005 『平尾貴四男作品資料目録』 東京：日本近代音楽館

- 日本近代洋楽史研究会 1995 『明治期日本人と音楽』 東京：国立音楽大学附属図書館
- 深尾須磨子 1930 『牝鶏の視野』 東京：改造社
- 堀内敬三 1948 『音楽五十年史』 東京：鱒書房
- 松下鈞 1997 『近代日本音楽年鑑』昭和5年版 東京：大空社
- 松本太郎 1959 「楽界の記録（演奏）」『音楽年鑑』（昭和35年版）38, 59 東京：音楽之友社
- 三浦俊三郎 1931 『本邦洋楽變遷史』 東京：日東書院
- 門馬直衛 1929 曲目解説「花の春」 山田耕作（編）1929 『世界音楽全集』第7巻: 255 東京：春秋社
- 四家文子 1970 「天才橋本国彦を偲んで」『橋本国彦歌曲集1』202-205 東京：全音楽譜出版社
- 渡邊玲子 2023 「セノオ楽譜にみる近代日本のフルート・レパートリー」 国立音楽大学『音楽研究 大学院研究年報』第35輯: 255-268

楽譜（曲集、ピース譜、付録）[作曲家別]

- グノー、シャルル 《夜の調べ/Serenade》 1919（第8版） 東京：セノオ音楽出版社 ピース譜
- 《夜のしらべ》 天谷秀、近藤逸五郎（編）1909 『女聲唱歌』 東京：水野書店
- 橋本国彦 《城ヶ島の雨》 1928（初版） 東京：共益商社書店 ピース譜
- 《城ヶ島の雨》『日本歌曲全集⑨ 橋本国彦作品集』 1991 東京：全音楽譜出版社
- 《城ヶ島の雨》、《幌馬車》、《笛》 音楽之友社（編）1993 『日本歌曲全集9 橋本国彦1』 東京：音楽之友社
- 《城ヶ島の雨》、《お菓子の家》、《山の母》、《幌馬車》、《笛》、《夢見る丘の鈴蘭》 四家文子（編）2010（第10版）『橋本国彦歌曲集1』 東京：全音楽譜出版社
- 《笛吹き女》 全音楽譜出版社出版部（編）1996 『橋本国彦歌曲集2』 東京：全音楽譜出版社
- 《富士山見たら》 1930（初版） 東京：共益商社書店 ピース譜
- 服部正 《からたち》 神田龍一（編）1936 『標準版 世界音楽全集』 東京：春秋社
- 《からたち》 高木東六（編）1936 『日本獨唱曲集Ⅱ』 東京：春秋社
- 平井保喜 《ふるさとの》 欧米楽譜出版社（編）1939 『日本歌曲集 第1篇 / 平井保喜』 東京：欧米楽譜出版社
- 深井史郎 《日本の笛》、《秋》、《ふるさと》 内田るり子編 1971 『深井史郎歌曲集』 東京：全音楽譜出版社
- 藤井清水 《おかよ》 弘田龍太郎・藤井清水（編）1930 『世界音楽全集』第13巻 東京：春秋社
- 《おかよ》 金田一春彦 1982 『藤井清水歌曲集』 東京：アカデミア・ミュージック
- 松平頼則 1930 《フルートとピアノのためのソナチネ》 自筆譜 茨城県立歴史館保管
- 梁田貞 《花の春》 1919（再版） 東京：共益商社書店 ピース譜
- 《花の春》 山田耕作（編）1929 『世界音楽全集』第7巻 東京：春秋社
- 《花の春》 1933 『梁田貞歌曲全集1』 東京：目黒書店
- 《花の春》 草野貞二（編）1942（第9版）『なつかしの愛唱歌第一編』 東京：新興音楽出版社
- 《昼の夢》 1914（初版）、1917（再版）、1921（第3, 4版） 東京：十字屋楽器店 ピース譜
- 《昼の夢》 音楽之友社（編）1950（第1刷）、1967（第26刷）『独唱名曲八十番』 東京：音楽之友社

- 《昼の夢》、《幌馬車》 全音楽譜出版社出版部（編） 1958（第1刷）、2001（第121刷）『日本名歌110曲集1』 東京：全音楽譜出版社
- 《昼の夢》、《花の春》、《鈴蘭》、《蝶の夢》、《二つの里》 玉川大学編集部（編） 1961『梁田貞名曲集』 東京：玉川大学出版部
- 《昼の夢》、《鈴蘭》、《野ばら》 岩崎呉夫 1977『音楽の師 梁田貞人とその作品』 東京：東京音楽社
- 《昼の夢》 1979『世界女声合唱名曲選4 日本抒情歌篇』 東京：東京音楽社
- 《昼の夢》 中目徹（編） 1999（第12版）『詩情あふれる世界の名曲 名歌100曲選①』 東京：東亜音楽社

電子資料、CD

橋本国彦 《城ヶ島の雨》 岡村雅雄（フルート）

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1328792/1/1>（2024年1月12日最終アクセス）

——《城ヶ島の雨》 吉田雅夫（フルート）

<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000003-I1331346-00>（2024年1月12日最終アクセス）

ビショップ、ヘンリー・ローリー 《みよ、やさしき雲雀を》1932 関屋敏子（歌）『SP時代の名演奏家 日本洋楽史 声楽・女声篇Ⅲ』 1995 Vintage / Yamano Music: YMCD-1026

梁田貞 《昼の夢》 1944 宮田清蔵（フルート） コロムビア

<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3572564>（2024年1月12日最終アクセス）

——《昼の夢》 1932 荻野綾子（歌）『SP時代の名演奏家 日本洋楽史 声楽・女声篇Ⅱ』 1995 Vintage / Yamano Music: YMCD-1025

——《昼の夢》 1933 奥田良三（歌）『日本SP名盤復刻選集Ⅲ』 2007 Rohm Music Foundation: ANOC-6071

英字新聞

The Japan Gazette 1889 (June 5th 2, 7th 2, 8th 3, 11th 2, 13th 2, 18th 2, 22nd 3, and 25th 3)

The Japan Weekly Mail 1889 (June 8th 552-553, 15th 582, 22nd 612, and 29th 636-637)